

県道稻童新田原停車場線関係埋蔵文化財発掘調査報告1

稻童三田遺跡

行橋市文化財調査報告書 第56集

2015

行橋市教育委員会

序

本書は、平成 25 年度に県道稻童新田原停車場線の工事に先立ち実施しました、稻童三田遺跡の発掘調査の報告書です。

遺跡の所在する稻童地区は京都府平野南東部の低台地上にあたり、近辺には、稻童古墳群や稻童 1 号掩体壕など多くの遺跡が知られています。今回の調査では近世を中心とする遺構、遺物を確認しましたが、この成果は当地周辺の地域史の解明に寄与する重要な成果と思われます。本書が学術研究はもとより埋蔵文化財への理解と認識を深めるために、広く活用されることを願います。

なお、発掘調査および報告書作成に当たって御協力いただいた、福岡県京築県土整備事務所、福岡県教育委員会、地元稻童上区の方々をはじめとする関係各位に深く感謝いたします。

平成 27 年 3 月

行橋市教育委員会
教育長職務代理者
教育部長 坪根 義光

例　　言

1. 本書は、福岡県行橋市大字稻童 3061-2 ほかに所在する稻童三田遺跡の発掘調査報告書である。県道稻童新田原停車場線の工事に伴い、県の受託金を受け、平成 24 年度に発掘調査を実施した。
2. 調査および報告書作成は、行橋市教育委員会が主体となって行った。調査組織は第 1 章第 2 節に記す。
3. 遺構の実測は中島裕子、古木初子、山口裕平が行った。
4. 遺構写真は山口が撮影した。
5. 遺構図の整理は松尾留衣、山口が行った。
6. 遺物の接合・復元は枝吉恵美、佐々木豊子が行った。
7. 遺物の実測は定野美津子、山口が行った。
8. 遺物写真は山口が撮影した。
9. 遺構・遺物図面の浄書は松尾、松本まゆみが行った。
10. 本書に使用した遺構の略号は SD（溝）である。
11. 本書に使用した方位は、世界測地系に基づく座標北である。
12. 報告した遺物、図面、写真は行橋市教育委員会において保管している。
13. 本書の執筆および編集は、山口が行った。

本文目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯と経過	1
第2節 調査体制	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 稲童三田遺跡	5
第4章 結語	9

図版目次

図版 1	稻童三田遺跡の位置
図版 2	1. I区全景（西から） 2. I区全景（東から） 3. I区南側（北東から）
図版 3	1. I区東側（西から） 2. II区全景（西から） 3. II区西側（南東から）
図版 4	稻童三田遺跡出土遺物

挿図目次

第 1 図	稻童三田遺跡調査区域 (1/5,000)
第 2 図	稻童三田遺跡の位置 (1/2,000,000)
第 3 図	京都平野の主要遺跡分布図 (1/80,000)
第 4 図	発掘調査の様子
第 5 図	稻童三田遺跡遺構配置図 (1/200)
第 6 図	稻童三田遺跡出土遺物実測図 (1/3・1/2)

表目次

表 1	稻童三田遺跡出土遺物観察表
-----	---------------

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯と経過

県道稲童新田原停車場線（福岡県道244号）は、行橋市道場寺から同稲童までを結ぶ、全長2319mの一般県道である。国道10号から分岐する新田原駅前を起点とし、稲童地区を東西に走り、稲童漁港付近で終点となるこの県道は、行橋市南東部の新田原地区に密着した生活道路であるが、道路の幅員は狭く、十分な歩道も確保されていないため、沿線にある仲津小学校、仲津中学校へ通う小・中学校生らの登下校路としてはははなだ危険な状態下にあった。

このため、福岡県京築県土整備事務所は、新田原駅前から仲津中学校付近までの約1.1kmに対し、車道拡幅と歩道の新設を事業化（一般県道稲童新田原停車場線歩道設置工事）し、平成24年5月に行橋市教育委員会に対し、埋蔵文化財の有無の照会を行った。照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地では無かったものの段丘上に遺跡の存在が想定されたため、平成24年9月12日に工事予定地点の計6ヶ所で試掘調査を行った。その結果、行橋市大字稲童3061-2番地に設置した試掘坑で溝などの遺構を確認した。このため小字名より稲童三田遺跡（遺跡番号14049051）と名付け、福岡県教育委員会に対し試掘調査の結果報告を行い、周知の埋蔵文化財包蔵地として新規の決定を受けた。このことから福岡県京築県土整備事務所と行橋市教育委員会の間で稲童三田遺跡の発掘調査に関する協議を行い、翌平成25年度内に行橋市教育委員会が主体となり発掘調査を行う運びとなった。

調査は平成25年8月23日から同10月3日まで、実数22日間をかけて行った。調査面積は約250m²で、調査体制は次節に示す通りである。

第2節 調査体制

現地調査（平成25年度）

総括	行橋市教育委員会 教育長	山田 英俊
	教育部長	三角 正純
調査	教育部 文化課長兼文化財保護係長	小川 秀樹
	教育部 文化課 文化財保護係	中原 博
	教育部 文化課 文化財保護係	山口 裕平（調査担当）
	教育部 文化課 文化財保護係	中川 優子
庶務	教育部 文化課 文化振興係長	辛嶋 智恵子
	教育部 文化課 文化振興係	田坂 彩

発掘調査作業員

赤波江静代 安藤 隆弘 生本 知子 大村 英幸 緒方 景俊 小野田トミエ 小渕八寿子
佐野 夏子 中島 裕子 古木 初子 松尾 公子 山田 拓三 山本 要二 吉田 幸子

報告書作成（平成26年度）

総括	行橋市教育委員会 教育長	山田 英俊（～10月8日）
	教育部長	灰田 利明（～9月30日）
調査	教育部長	坪根 義光（10月1日～）
	教育部 文化課長	小川 秀樹（～9月30日）
	教育部 文化課長	亀田 秀雄（10月1日～）
	教育部 文化課 参事兼文化財保護係長	小川 秀樹（10月1日～）
	教育部 文化課 文化財保護係長	辛嶋千恵子（～9月30日）
	教育部 文化課 文化財保護係	中原 博

庶務

教育部 文化課 文化財保護係
教育部 文化課 文化振興係長
教育部 文化課 文化振興係
教育部 文化課 文化振興係
教育部 文化課 文化振興係

山口 裕平 (報告書担当)
高尾信次郎
森 雅代
入生 佳奈
田坂 彩

整理作業員

枝吉 恵美 奥野 康代 鎌田 尚子 佐々木豊子 定野美津子 松尾 留衣 松本まゆみ

第3節 調査の経過（日誌抄）

平成 25 年 8 月 23 日（金）【晴れのち雨】

西側の調査区（I 区）より表土剥ぎを開始する。

平成 25 年 8 月 26 日（月）【曇りのち晴れ】

I 区の表土剥ぎが終わる。

平成 25 年 8 月 27 日（火）【晴れ】

I 区の遺構検出を行う。遺構はほとんど無いようだ。

平成 25 年 8 月 28 日（水）【晴れ】

遺構検出を終え、写真を撮影する。杭打ち後、平板測量を行う。

平成 25 年 8 月 29 日（木）【曇り】

遺構の掘り下げを行い、その後、全景写真を撮影する。遺物の取り上げを行う。台風の接近に備えて現場を養生する。

平成 25 年 9 月 3 日（火）【雨】

追加の平板測量を行う。

平成 25 年 9 月 5 日（木）【晴れ】

I 区の埋め戻しを行う。

平成 25 年 9 月 6 日（金）【晴れ】

I 区の埋め戻しを終え、I 区の調査が完了する。引き続き、東側の調査区（II 区）の表土剥ぎに移る。

平成 25 年 9 月 9 日（月）【晴れ】

II 区の遺構検出を行う。

平成 25 年 9 月 10 日（火）【晴れ】

引き続き II 区の遺構検出を行う。東側は大きく複雑を受けているようだ。

平成 25 年 9 月 18 日（水）【晴れ】

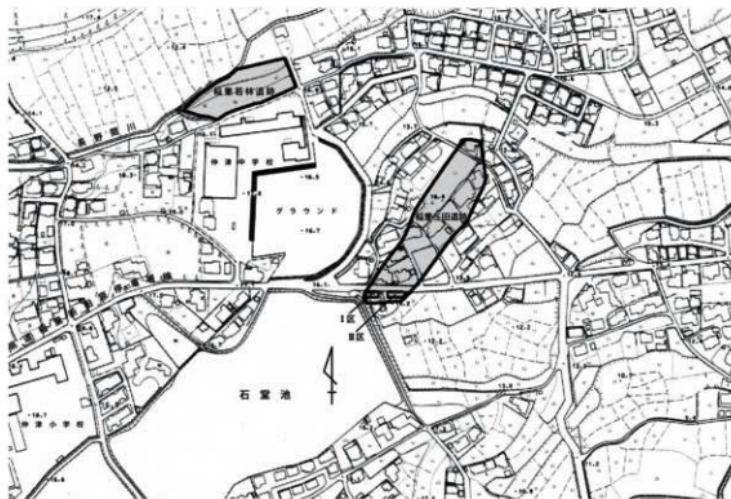
お盆休みを挟む。II 区の遺構検出を行う。

平成 25 年 9 月 26 日（木）【晴れ】

遺構の掘り下げを行う。その後、全景写真を撮影する。併行して杭打ちをし、平板測量を行う。

平成 25 年 10 月 3 日（木）【晴れ】

II 区の埋め戻しを行う。調査をすべて終了する。



第1図 稲童三田遺跡調査区域 (1/5,000)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

福岡県行橋市は県北東部に所在する（第2図）。この地域は旧郡名の頭文字を取り京築地方と呼ばれ、行橋市はその中心都市で人口72,833人（平成26年12月末日現在）を擁す。市域は京都平野の中央部を占め、東に豊前海（広域には周防灘）を臨む。山地は少なく、南西部に馬ヶ岳〔216m〕、御所ヶ岳〔ホトギ山：246.9m〕などが東西に連なり、みやこ町豊津・犀川地域と画す。北九州市小倉南区と接する北西部は国指定特別天然記念物の平尾台カルストの石灰岩台地が広がる。他に観音山〔202m〕、幸ノ山〔178m〕、畠山〔121.7m〕など少數の独立山塊がある。市内には霧峰・英彦山を源とする今川、祓川をはじめ、小波瀬川、長崎川、江尻川、音無川などの中小の河川が流れ、豊前海に注ぐ。

本書で報告する稻童三田遺跡は、畠山の南の海岸段丘、標高14m前後に所在する。

第2節 歴史的環境

京都平野における人類の痕跡は、今からおよそ3万年前の後期旧石器時代初頭にさかのぼり、市域では渡築紫遺跡C区で該期の石器および礫群が見つかっている。

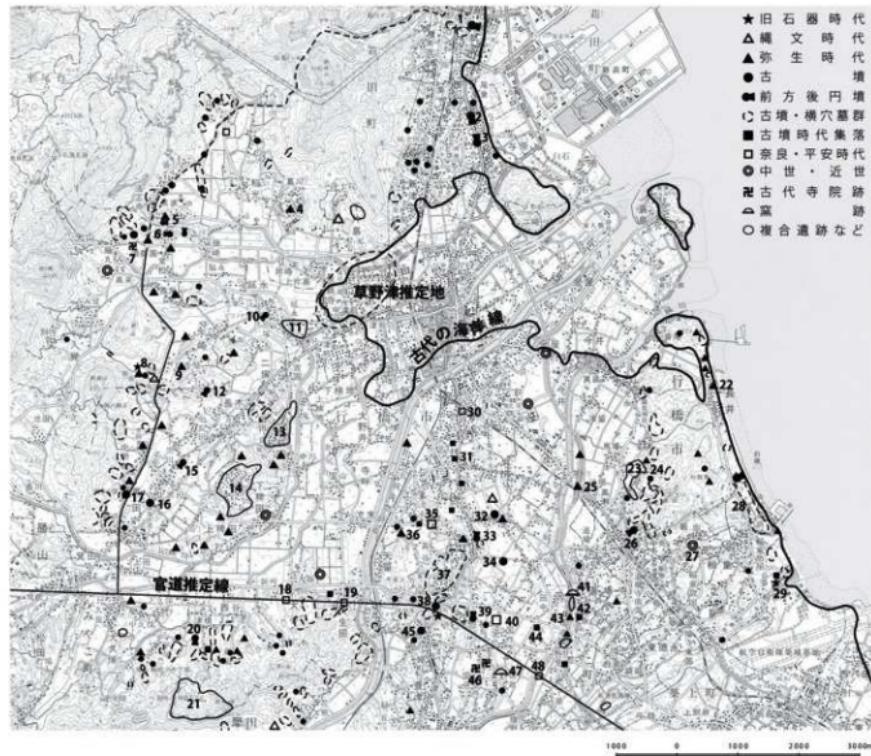
続く縄文時代は、全国的に温暖化の影響で海進が発達した。そのピークは約4800年前頃で、現在の延永一津熊一大橋—今井一津留を結ぶラインがその頃の汀線と考えられている。この汀線は弥生時代以降若干海退するものの、江戸時代以来の干拓によって、蓑島と陸続きになるまで、京都平野は現在とは大きく異なる内湾性の臨海平野を形成していた（第3図）。縄文時代の遺跡は、遺構は不明確ながら、早期の押型文土器や後期の西平式系土器など、各期の遺物が徐々に知られるようになって来た。

2500年前頃を境に、生業の主体を狩猟採集とする縄文時代から稻作農耕とする弥生時代へと変化していく。この地域において遺跡が爆発的に増加するのは弥生前期後半からで、下稗田遺跡、前田山遺跡など大規模な集落が形成される。

3世紀後半頃に始まる古墳時代には九州で最大・最古級の畿内型前方後円墳である石塚山古墳が苅田町域に築かれ、その海浜部で前期から中期への首長墓系譜をたどることができる。後期には京都平野内陸部



第2図 稲童三田遺跡の位置 (1/2,000,000)



- | | | | | | |
|-------------|-----------|-------------|-------------|--------------|-------------|
| 1. 石塚山古墳 | 2. 番塚古墳 | 3. 御所山古墳 | 4. 萩川道跡 | 5. 黒添メト塚古墳 | 6. 徳永丸山古墳 |
| 7. 椿市廃寺 | 8. 入覧大原道跡 | 9. 下崎丸山道跡 | 10. ピワノクマ古墳 | 11. 延永ヤヨミ園道跡 | 12. 八雷古墳 |
| 13. 前田山道跡 | 14. 下柳田道跡 | 15. 庄屋塚古墳 | 16. 植塚古墳 | 17. 織塚古墳 | 18. 大谷車軸道跡 |
| 19. 天生田大池道跡 | 20. 片峰1号墳 | 21. 御所ヶ谷神籠石 | 22. 長井道跡 | 23. 代道跡 | 24. 馬場代2号墳 |
| 25. 辻塚道跡 | 26. 半人塚古墳 | 27. 稲童三田遺跡 | 28. 植童古墳群 | 29. 渡築紫道跡 | 30. 崎野道跡 |
| 31. 福富小畠道跡 | 32. 侍塚道跡 | 33. ヒコモ塚古墳 | 34. 鬼熊道跡 | 35. 福原長者原道跡 | 36. 矢留堂ノ前道跡 |
| 37. 竹並道跡 | 38. 甲塚方墳 | 39. 聖社古墳 | 40. 豊前国府跡 | 41. 京屋敷窯跡 | 42. 織先道跡 |
| 43. 徳永川ノ上道跡 | 44. 京ヶ辻道跡 | 45. 稲德甲塚古墳 | 46. 豊前国分寺跡 | 47. 徳政瓦窯跡 | 48. 告見極ノ口道跡 |

第3図 京都平野の主要遺跡分布図 (1/80,000)

に移動し、市内では八雷古墳が6世紀前半の首長墓と考えられる。7世紀になると全国的に古墳建築も停止傾向にあり古墳時代の終末期に入るが、京都平野では古墳時代終末期になても古墳建築が盛行する。市内では福丸古墳群、渡築紫古墳群などが調査されている。この時代は古代史の上では飛鳥時代であり、仏教文化が地方にも根付き始めた頃である。市内では福丸地区に椿市廃寺が建立された。またこの頃、対大陸・半島情勢の悪化に伴い、津積に古代山城である御所ヶ谷神籠石が築かれた。泉地区に所在する福原長者原遺跡は東西幅150mの区域をもつ8世紀前半の官衙遺跡で、奈良時代における豊前国府の可能性が指摘されている。

本書で報告する稻童三田遺跡は、近世以降の散布地である。

第3章 稲童三田遺跡

稻童三田遺跡は本事業に伴い新規に確認した遺跡である。今回の調査区は、発掘が歩道設置に起因することから東西方向に横長となり、排土置き場の関係より1回の反転を行いながら調査を進めた。西側の調査区をI区、東側をII区とし、その間（東西約15m、南北約5m、面積約80m²）は人家の通用口となるため、発掘調査を行うことができなかった。調査区の行政地番は行橋市大字稻童3061-2、3063-5番地にある。調査面積は約250m²である。

調査の結果、今回の調査区は近世以降の散布地で、I区とII区の西側から小土坑や柱穴、溝などの遺構を僅かに検出した（第5図、図版2・3）。II区の東側は大きく削平を受けており、遺構は残っていなかった。調査区の基本層序は上位より黒褐色土、黄褐色あるいは赤褐色を呈する風化火山灰層となる。遺構検出面（地山）は前述の黄褐色あるいは赤褐色風化火山灰層である。

以下では遺物の出土した遺構（溝）と採集遺物を本遺跡の調査成果として報告する。

（1）溝

II区の西側（図版3-2）では、調査区を斜めに横切る並列した溝を数条検出した。いずれも幅30cm程の浅い溝で、上部は削平を受けているものと考えられる。そのうち、最も東の溝（SD001）と最も北の溝（SD002）より遺物が出土した。



調査前（西から）



表土剥ぎ

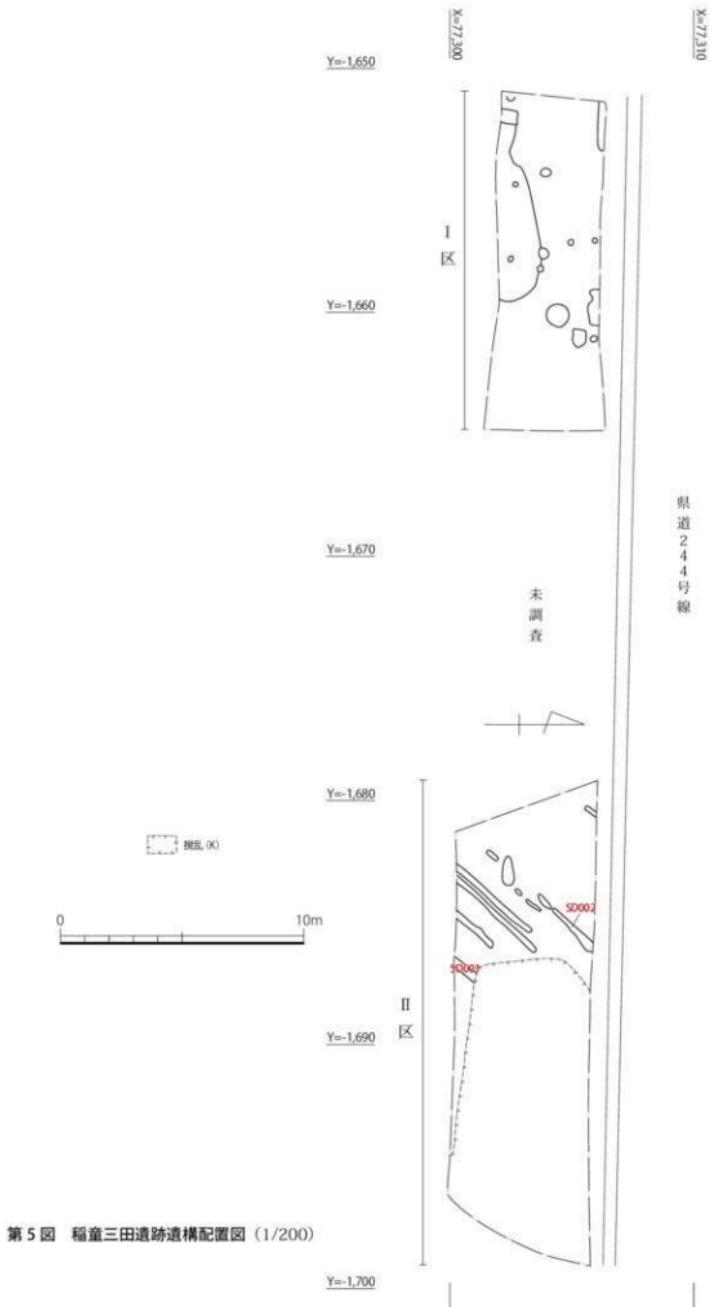


I区調査風景



II区調査風景

第4図 発掘調査の様子



SD001 (第5図、図版3・4)

II区の西側で検出した。溝の北側は搅乱坑に切られており、南側は調査区外へと続く。埋土より土師質土器の小片が出土した。

土師質土器 1は焙烙。口縁部の小片である。ヨコナデ成形で仕上げており、口縁部と底部の境には稜線が入る。底部の外側には煤が全面に付着する。胎土は比較的しまっており、表面には細かい雲母片を観察できる。残高3.1cm。近世～近代の所産。

SD002 (第5図、図版3・4)

II区の西側で検出した。溝の北側は調査区外へと続いており、南側は浅くなり途切れている。埋土より陶器の小片が出土した。

陶器 2は器種不明。胴部の小片と考えられる。土師質を呈すが、よく焼き締められておりここでは陶器として報告する。残高6.1cm。近世～近代の所産か。

(2) 採集遺物

本調査ではパンケース1箱分の遺物を発見したが、ほとんどが表面採集遺物である。以下、復元図示でてきたものを報告する(第6図、図版4、表1)。

土師質土器 3は焙烙。口縁部の小片である。ヨコナデ成形で仕上げており、口縁部と底部の境には稜線が入る。底部の外側には煤が付着する。残高3.2cm。近世～近代の所産と考えられる。I区にて採集。

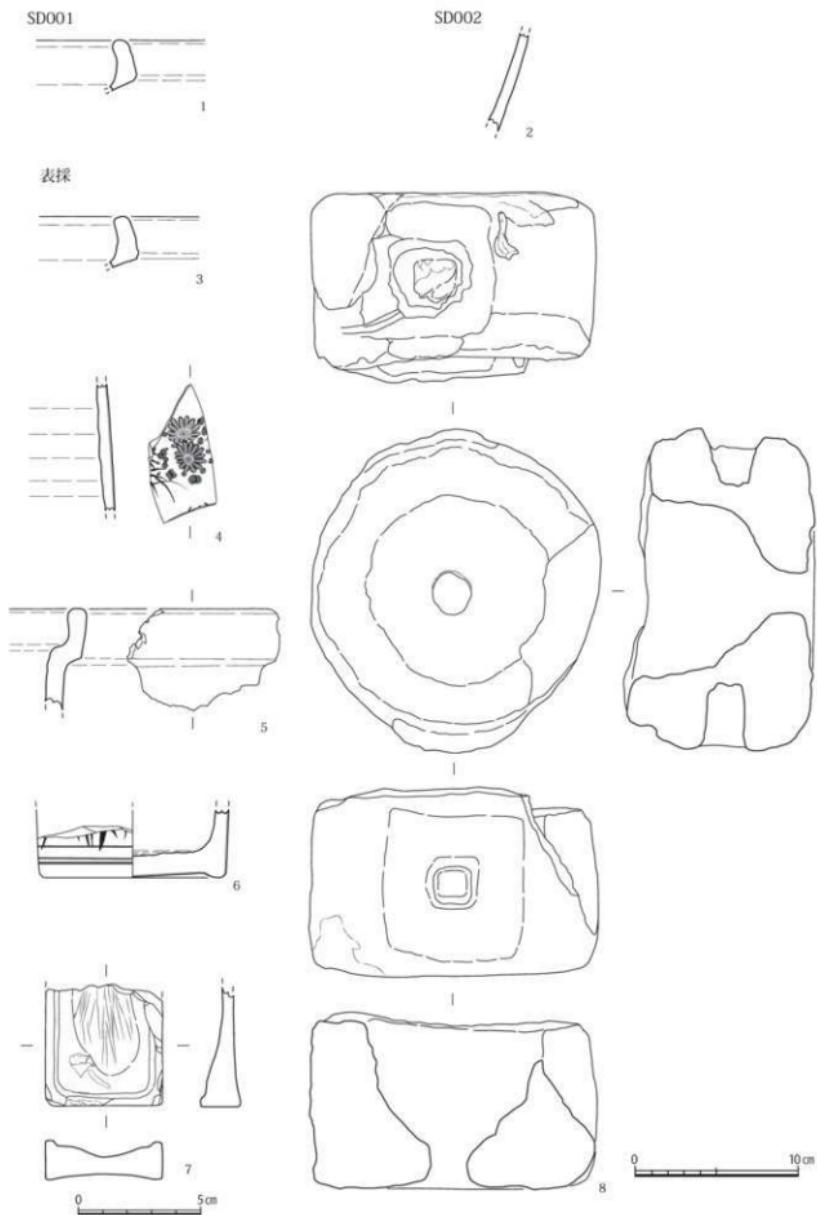
陶器 4は瓶。胴部の小片である。ロクロナデ成形で、外面に草花文様(菊花)を色絵付けし、薄い白濁釉をかけて仕上げる。残高7.9cm。近世～近代の所産か。I区採集。5は土管。一方の端部の破片である。胎土は数mmの砂礫を多く含み粗い。灰褐色の釉薬をかけて仕上げている。近代の所産と考えられる。II区にて採集。

染付 6は瓶。底部片で、復元底径11.6cm、残高4.2cmを測る。外面には白化粧土を施し、草花と思しき文様をコバルトで絵付けし、透明釉をかけて仕上げる。豊付は露胎となる。近世～近代の所産と考えられる。II区にて採集。

石製品 7は硯。2分の1程度の破片である。使用痕を多く残す。石材の色調が赤褐色を呈すことから赤間石を用いたものではないかと考える。近世～近代の所産か。II区にて採集。8は石臼。幅20cm程度と比較的小型であることから、茶臼と考えられる。側面には把手を装着するほぞ穴が2ヶ所抉られている。近世～近代の所産。II区にて採集。

番号	出土遺場	種別	断面	法寸(cm)	説明	地城	胎土	色調	地存	備考
1	SD001	土師質 土器	焙烙	残高3.1	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	黒褐色～茶褐色の粗砂・漂石 を多く含む	内:暗褐色 外:暗褐色	II区 日暮御所	泥に煤が付着
2	SD002	陶器	不明	残高6.1	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	黒褐色～茶褐色の粗砂・漂石 を多く含む	内:浅黄褐色 外:浅黄褐色	I区 日暮御所	
3	吉原	土師質 土器	焙烙	残高3.2	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	良好	黒褐色～茶褐色の粗砂・漂石 を多く含む	内:暗褐色 外:暗褐色	II区 日暮御所	泥に煤が付着 I区採集
4	吉原	陶器	瓶	残高7.9	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ～色絵付～施釉	良好	精良	黒褐色～茶褐色の粗砂・漂石 を多く含む	I区 日暮御所	I区採集
5	吉原	陶器	土管	残長3.3 内:青釉輪軸	内:ヨコナデ～施釉 外:ヨコナデ～施釉	良好	黒褐色～茶褐色の粗砂・漂石 を多く含む	内:暗褐色 外:暗褐色	II区 日暮御所	II区採集
6	吉原	染付	瓶	復元底径11.6 残高4.2	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ～施釉	良好	精良	黒褐色～茶褐色の粗砂・漂石 を多く含む	I区 日暮御所	I区採集
7	吉原	石製品	硯	底径6.0 厚さ1.6	—	—	岩鉄石?	灰褐色 II区 日暮御所	II区 日暮御所	II区採集
8	吉原	石製品	石臼	幅20.1 高さ11.6 重量3,850g	—	—	研磨面	灰白色 II区 日暮御所	一部欠損	II区採集

表1 稲童三田遺跡出土遺物観察表



第6図 稲童三田遺跡出土遺物実測図 (1/3・1/2)

第4章 結語

以上、稻童三田遺跡の発掘調査成果を報告してきた。調査面積が狭小で遺構密度も低かったことから遺跡の様相を考察するには十分ではないが、最後に結語として遺跡の総括を行い、今回検討できなかった課題等を提起したい。

稻童三田遺跡の今回の調査では小さな土坑、柱穴、溝と複数の遺構を確認した。遺物を伴った遺構は僅かに2条の溝のみであったが、遺物の帰属時期より稻童三田遺跡は近世以降の遺跡であることが分かった。今回の調査地点は、周辺の地形を観察すると微高地が谷に向かって南西へ降っていく縁辺部に立地することが分かる。したがって稻童三田遺跡の生活域の中心は、今回の調査区から北東側に広がる微高地上に展開する事が予測されよう。

稻童三田遺跡の位置する行橋市稻童地区は、後期旧石器の製作遺跡である渡築葉遺跡や金銅立飾付眉庇付冑に代表される豊富な甲冑群を保有する稻童古墳群など先史以来多くの遺跡が営まれてきたが、その近世頃の様子については僅かに残る古文書等にのみ知ることができた。具体的な例を示すと、集落の中心は稻童三田遺跡より東700mに位置する安浦神社付近であり、元和年間の「人畜改帳」には家数57、人数116と記録されている（平凡社刊『福岡県の地名』）。今回の調査成果は、その様相を具体的に示すものではないが、限られた文献史料を補完する意味で考古学的調査が果たす役割は大きく、今後の地域史解明のためにも周辺の調査事例の蓄積を待ちたい。

図 版



稻童三田遺跡の位置（上が東）

図版2 稲童三田遺跡



1. I区全景（西から）



2. I区全景（東から）



3. I区南側（北東から）



1. I区東側（西から）

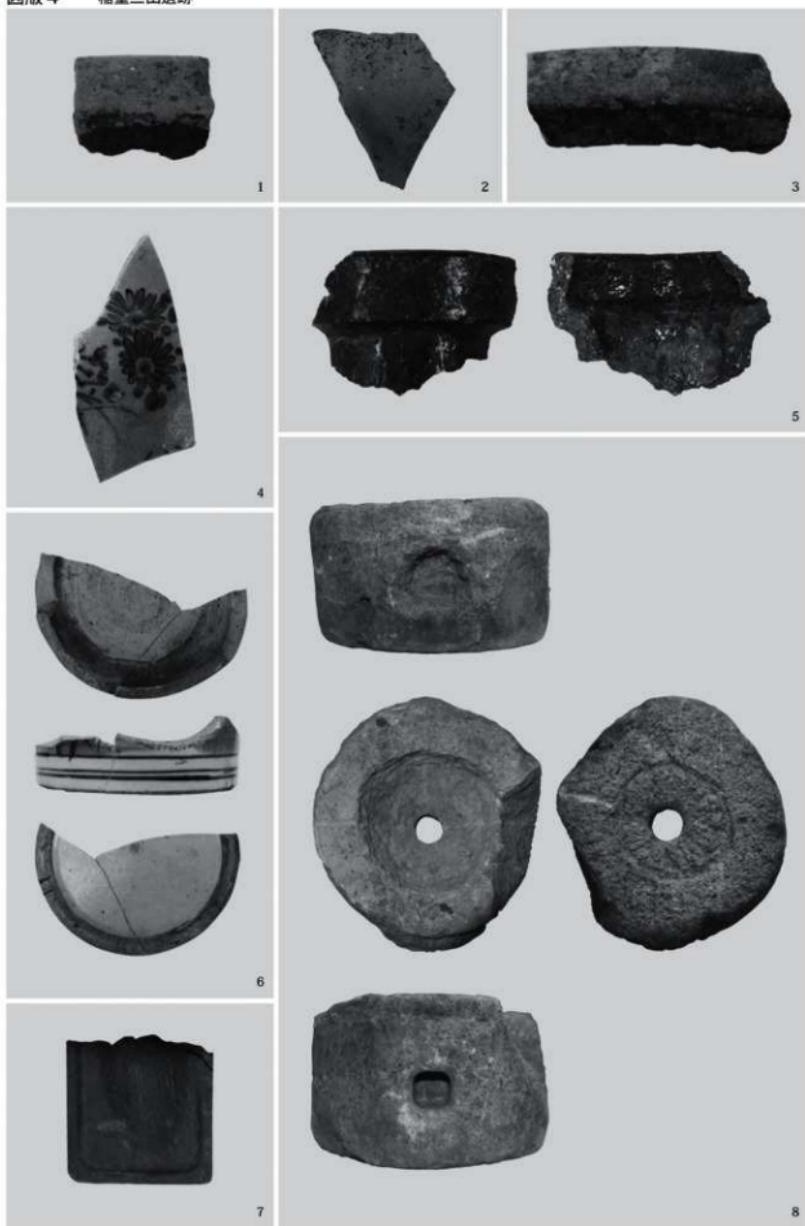


2. II区全景（西から）



3. II区西側（南東から）

図版4 稲童三田遺跡



稻童三田遺跡出土遺物

報 告 書 抄 錄

2015年(平成27年)3月31日 猪子

稻童三田遺跡

行橋市文化財調査報告書 第56集

著作権所有 福岡県行橋市中央一丁目1番1号

発行 行橋市教育委員会

印刷 福岡県行橋市南大橋三丁目15番19号
京築印刷株式会社